

序文

Foreword

1 本書の狙い

本書『英和翻訳の複層アプローチ』の狙いは、英語から日本語への翻訳に必要な理論、方法論、および技法（応用）を多層的、系統的に説明することです。

本書の内容は、著者の言語学基盤の研究に加え、英和・和英翻訳の翻訳者、翻訳講師、および講演者としての長年にわたる経験が基になっています。また、著者が40年以上のアメリカ合衆国での在住期間に収集・分析した生の言語データを活用しています。

2 本書の内容に関する経緯

何年前か、私の住む北カリフォルニアで英和と和英の翻訳講座を開いた際、適切な教科書が見つからなかったため、私自身が教科書を書きました。2020年には『英日翻訳の技術－認知言語学的発想！』（くろしお出版）という本を私が共著者として発表しましたが、その内容は私が講師を務めていた大学や翻訳学校の受講生のために書いた教科書と、共著者の認知言語学的考察を基にしたものでした。

『英日翻訳の技術－認知言語学的発想！』では、英和翻訳に際して重要な技術をかいつまんで紹介しましたが、翻訳の理論、方法論、技法の全体を網羅するまでには至りませんでした。そこで、私は網羅的、系統的な翻訳技術を参考書として紹介したいと思って本書を執筆しました。

『英日翻訳の技術 — 認知言語学的発想!』と本書には、内容がほんの一部重複しているところがあります。ただし、この重複部分に関しては、説明内容を推敲・追加し、例文はすべて新しいものに更新してあります。

3 対象読者

本書は、職業としての翻訳者を目指す方、および翻訳技術を復習したい実務翻訳者はもちろん、他にも英語学習者、英文読解力を高めたい方、および日本語の書き方を上達させたい方にも大いに役立ちます。特に英文解釈力の向上に興味のある方に対して、翻訳者であるかどうかにかかわらず、新鮮な情報を提供できるよう、英文解釈の分野にも注力して執筆しました。

4 本書で扱う翻訳の方向

本書は日本で刊行するために日本語で著作したという背景もあり、対象読者のおおむねが日本語を母語としていることを前提としています。日本語を母語とする人々が得意とし、またその人々の需要が高いのは英語から日本語への翻訳です。したがって、本書では英語から日本語への翻訳、すなわち英和翻訳について説明します。英和翻訳と和英翻訳に関する詳細は、第Ⅰ部：第1章の「2 どの言語からどの言語に翻訳すべきか」を参照してください。

逆の方向、つまり日本語から英語への翻訳の需要も高いのですが、和英翻訳の場合、英和翻訳のノウハウをそのままひっくり返して使うわけにはいかないため、和英翻訳に関しては期を改めて紹介したいと思います。

5 本書の独自性

5.1 英語圏（アメリカ合衆国）在住のバイリンガルの視点

著者の英和・和英翻訳者としての視点のみにとどまらず、英語圏在住のバイリンガルとしてのフレッシュな視点からも英和翻訳を検討しました。

5.2 汎用性

翻訳技術に関して市販されている書籍には、例文を文芸作品から引用し、文芸翻訳用に書かれたものが多いという傾向がありますが、本書は技術、ビジネス、フィクション、およびノンフィクションの各分野から例文を多く引用したことに特色があります。ここに収容した英和翻訳の説明は、産業翻訳、文芸翻訳の両方に活用できます。

5.3 リーダー・フレンドリネス

本書の内容は長年の経験から編み出した著者独自の翻訳理論、その他の翻訳理論、方法論、およびコミュニケーション理論や文化論に基づいた実践技術ですが、いわゆる学術書という形式にはせず、言語学、コミュニケーション学などの専門知識を持たない方でも十分わかるように配慮しました。

5.4 英文和訳過程の系統的説明

翻訳に関するトピックを論理グループごとにまとめ、系統的に説明することを目指しました。

5.5 英文和訳過程の多層的分析

職業としての翻訳は「意識」です。直訳を越えてどのように意識するかを、翻訳過程には複数の「層」（表層、深層など）があるという考えに基づいて説明してあります。

6 本書の利用方法

6.1 初めから終わりまで順序に従って読む

包括的な翻訳技術を系統的に身につけることができます。

6.2 具体的な技術項目を探して読む

いわゆる実務の参考書としての使い方で、翻訳実務中に知りたいと思った項目を探して読む方法です。

目次

Table of Contents

序文	3
1 本書の狙い	3
2 本書の内容に関する経緯	3
3 対象読者	4
4 本書で扱う翻訳の方向	4
5 本書の独自性	4
6 本書の利用方法	5
7 謝辞	6

第Ⅰ部 翻訳の背景知識 13

第1章 翻訳の基礎知識	14
1 職業翻訳の種類	14
2 どの言語からどの言語に翻訳するべきか	18
3 職業翻訳プロセスの基本的な流れ	20
4 翻訳と通訳は似ているか	20
5 イギリス英語、アメリカ英語、国際英語など	22
6 翻訳者の役割	23
第2章 日本の英語教育事情と翻訳	29
1 日本における英語教育の歴史的背景	29
2 英語教育リソースの背景	30
3 学校英語および日本語の中の翻訳語	31
第3章 職業としての翻訳	35
1 職業としての英和翻訳における英文解釈の位置付け	35
2 職業翻訳者に要求されるもの	35
3 職業翻訳に必要なリソース	43

4	納品形態	47
5	機械翻訳、CAT、および AI の進展 vs. 翻訳者	47
6	英和翻訳の学習方法	48
	The Way I See It (1)	51

第Ⅱ部 英和翻訳の原則 53

第1章	翻訳理論	54
1	理論、方法、手順	54
2	翻訳における表層構造と深層構造	56
3	ことばからイメージへの変換	59
4	基底構造	61
5	英和翻訳の3つの原則	63
第2章	無生物主語	65
1	英語の無生物主語は日本語の主語になりにくい	65
2	無生物主語を副詞的表現の日本語にする	66
3	無生物主語と共に多用される英語動詞	69
4	「～により」「～によって」は慎重に	74
5	日本語で無生物主語を使用しても自然である場合	75
6	無生物主語を処理すべき典型的なケース	79
第3章	名詞句	82
1	名詞句内の語順に関する英日の違い	82
2	名詞の中に動詞を見る	83
3	名詞の中に形容詞を見る	84
4	動詞の原形+erの訳し方	85
5	職業人と職業分野の関係	87
第4章	順行訳	89
1	主要名詞を形容する表現に関する英日の違い	89
2	どのような場合に順行訳を考慮するか	91

第Ⅲ部 品詞レベルで考察する英和翻訳 107

第1章	冠詞	108
1	the と a (an) の訳し分け	108
2	〔数量形容詞+名詞〕に the が付く場合、付かない場合	110
3	冠詞と序数詞	113

The Way I See It (2)	117
第2章 代名詞	118
1 人称代名詞の訳し方	119
2 能ある翻訳者は代名詞をどうするか	121
3 指示代名詞の訳し方	122
第3章 数量形容詞	123
1 数量形容詞を含む主語の訳し方	123
2 many の訳としての「多くの～」と「～の多く」の違い	126
3 主観的数量形容詞と客観的数量形容詞	127
4 all、each、および every	130
第4章 副詞	132
1 文修飾の副詞の訳し方	133
2 文修飾する副詞のリストと使用例	135
3 英文における副詞の位置	137
4 原文を書き換えて訳す	138
5 頻度の副詞	140
第5章 助動詞	142
1 未来のイベントが起きる確実性	142
2 確実性の will の訳語	145
3 天気予報で使われる確実性の表現	147
4 「～でしょう」はいつ使うのか	150
5 may と can の純粋過去形としての might と could	150
6 may (might) want to... の意味	151
7 譲歩の may	152
8 助動詞の確実性以外の意味	153
第6章 前置詞	156
1 動詞を使って訳す	156
The Way I See It (3)	163
第7章 時の接続詞	164
1 千変万化する as	164
2 not ... until の訳	166
3 before は「後」、after は「前」？	169

第Ⅳ部 文レベルで考察する英和翻訳 171

第1章 比較級、同等比較、最上級	172
1 比較の対象を明白にする	173
2 状態変化の動詞を使う	173
3 比較の対象がはっきり現れていない原文	174
4 比較の対象がたいして重要でない場合	175
5 「より良い」「より大きい」など	176
6 同等比較	177
7 最上級	180
8 one of the most..., among the most... ..	183
第2章 受動態	186
1 受動態和訳の第1原則	186
2 受動態和訳の第2原則	188
3 受動態和訳の第3原則	190
4 受動態和訳の第4原則	190
第3章 時制	193
1 現在形は習慣・反復動作	193
2 職業の現在形	194
3 時制の一致	194
4 完了形	195
第4章 仮定法	199
1 if節のない仮定法構文	200
2 発想転換する	201
第5章 比喩、諺、格言および慣用表現	203
1 直喩	203
2 隱喩（暗喩）	204
3 諺、格言および慣用表現	205
The Way I See It (4)	209
第6章 直接話法と間接話法	210
1 英語における直接話法と間接話法	210
2 日本語ではどう表現するか	211
第7章 補足と短縮	213
1 補足の必要性	213
2 短縮の必要性	215

3	乱用は禁物	216
第8章	日本語構文の操作技巧	218
1	修飾表現と被修飾語はできるだけ近づける	218
2	名詞を修飾する形容表現の数とタイプを絞る	220
3	修飾表現を文にする	222
4	テニヲハを正しく使う	224
5	曖昧性を極力少なくする	224
6	並列表現の形を揃える	225
7	条件節を簡素化する	227
8	原文を解体して再編成する	230
9	文型を変える	233
10	具体的な表現を使う	234
付録		237
付録1	産業翻訳における日本語表現のルール	238
1	敬語表現	238
2	冗長表現を簡潔表現に変換する	242
3	産業翻訳で避けるべき表現	243
4	主語・主題を示す「は」	245
5	推奨に関するマニュアル本文の表現	245
付録2	産業翻訳に頻出する要注意単語	247
1	頻出用語：産業翻訳一般	247
2	頻出用語：ソフトウェア関連文書	256
後書き		261
参考文献		263

第 1 章

翻訳の基礎知識

Chapter 1

Essential Knowledge of Translation

1 職業翻訳の種類

職業翻訳の世界には、大きく分けて文芸翻訳と産業翻訳があります。文芸翻訳は出版翻訳とも呼ばれ、その名の通り出版された本を訳すものです。下表のような種類があります。

表 1：文芸翻訳のいろいろ

文芸翻訳	・娯楽本（ミステリー、SF、ロマンス、ホラーなど）
	・ノンフィクション（ビジネス書、旅行記、伝記、啓蒙書、実用書、政治関連など）
	・児童文学
	・詩、純文学

文芸翻訳における翻訳者の収入は原著者と同じく、売れた部数に対する印税収入です。したがって、翻訳者の収入もその本の売れ行きによって左右されます。仕事は、まだ翻訳されていない書籍を翻訳者自身が見つけて出版社に持ち込み、翻訳のお伺いを立てるという形式が主です。欧米諸国には昔から存在していた、いわゆる出版エージェントという代理業が、最近、日本にも登場してきたようです。文芸翻訳者は、このような代理業者を利用することもできます。

日本の英語教育事情と翻訳

Chapter 2

English Education in Japan and Translation

1 日本における英語教育の歴史的背景

近代史上で日本人が本格的に英語を学び始めたのは、200 年余にわたって続いた、いわゆる「鎖国」状態が解かれた 19 世紀後半以降であるとされています。その後、明治維新前後から、ヨーロッパから医学、天文学、化学などに関する書物が多数日本に輸入されるようになり、それを日本人大衆のために翻訳する需要ができたのが、近代日本の翻訳業の始まりと言えるのかもしれない。

明治維新になり、文明開化と呼ばれる文化的な変革が始まると、それに伴って西洋語がどっと日本に流入し始めました。その中でも英語の将来性を認識した日本の知識層の影響により、明治時代の尋常小学校では一時期英語が教えられたこともあると言われています。その後、第二次世界大戦の際に敵国語として排斥されるまで、英語は日本の教育制度の中に植え付けられることになります。第二次大戦後、英語は再び外国語の代表として日本の教育課程の必修科目になりました。

この背景の中で日本人が習った英語は、一体どういうものだったのでしょうか。幕末から明治時代にかけては、英語を母語とする人達と会話して意思伝達する必要性は、政治、貿易関係の世界以外ではほとんどなかったと言えます。その代わり、主に学術書、技術書として入ってきた洋書を判読する必

第1章

翻訳理論

Chapter 1

Translation Theory

翻訳理論と言っても、ここで大々的な講義を始めるつもりはありません。ただ、どのプロジェクトを実行するにも計画が必要であるのと同様、翻訳する際は、まず（１）その方向性に関して確固とした信念を持ち、（２）それに相いれる目的達成方法を決定し、その上で（３）その方法に基づいて最後に実際の作業の詳細をマッピングすることが重要です。

1 理論、方法、手順

今述べた（１）～（３）の３段階の作業は、物事を実行する際の指針として、それぞれ（１）理論、（２）方法、および（３）手順という名称に置き換えることができます。

この３つの作業の流れを、下から上に流れるイメージとして表したのが次の図です。

第2章 無生物主語

Chapter 2 The Inanimate Subject

1 英語の無生物主語は日本語の主語になりにくい

無生物主語の構文では、人間や動物以外のもの（物体、抽象名詞など）、つまり無生物が文の主語（動作の主体）になっています。英語ではこの構文は自然なもので、頻繁に現れます。主語＋他動詞＋目的語というのが無生物主語構文の典型的な形です。例文1もこの形を取っています。

例文1

原文 In 1918, an infectious disease called Spanish flu killed numerous people.

上の英文の「感染症」という無生物主語をそのまま日本語でも主語として忠実に訳すと、次のようになります。

試訳 1918年には、スペイン風邪と言われた感染症が数多くの人々を殺した。

上の訳は原文に忠実ではありますが、いくら文法的に正しいとはいえ、これでは辞書に載っていることばをそのまま使っただけで、日本語としては非

第4章 順行訳

Chapter 4 *The Top-Down Method*

1 主要名詞を形容する表現に関する英日の違い

名詞を修飾することばには形容詞、形容詞句、形容詞節があります。また、英語では冠詞も名詞を修飾します。形容詞は単語で、形容詞句と形容詞節は複数語で構成された形容詞的なことばです。そのうち、形容詞節は、その中に主語と動詞が含まれて文の形をしたものを言います。本書では、言語に関わらず、このような「形容詞的な役割を担うことば」をまとめて「形容表現」と呼ぶことにします。同様に、形容表現に限らず、ある品詞を修飾する表現を「修飾表現」と呼ぶことにします。たとえば、動詞を修飾する副詞、副詞句、および副詞節は、まとめて「修飾表現」と呼びます。

最初に、名詞を修飾する形容表現の位置に関して、次の例文を使って英語と日本語の違いを考察します。

例文 1

原文 Last weekend, I visited an old town that has been around since the mid-19th century.

訳例 先週末、私は 19 世紀中頃から続いている古い町を訪ねた。

この文の中から an old town that has been around since the mid-19th century

第1章 冠詞

Chapter 1 The Article

1 the と a (an) の訳し分け

英語の冠詞は名詞の前に付き、その名詞の属性の一部を示します。名詞を修飾 (modify or qualify) する品詞という意味では、ある種の形容詞と言ってもいいでしょう。冠詞には不定冠詞 a (an)、および定冠詞 the の2種類があります。また冠詞が名詞の前に付かない、いわゆる無冠詞の場合もあり、これも冠詞の使い方の一例です。

不定冠詞については、a の次に来る名詞が母音で始まるときのみ、(文法的ではなく) 音声学的な理由によって a が an に変わります。ですから、a と an は、文法的な観点からすれば同一のものです。

冠詞は日本語にない上、短い単語なので、非ネイティブスピーカーはとかくその重要性を見逃しがちですが、名詞の前に a (an) が付いているか、the が付いているか、または無冠詞であるかによって、その名詞の意味が大きく違ってくる場合がよくあります。ですから、冠詞は日本語を母語とする翻訳者にとっては必修科目であると言えるでしょう。

日本の学校では、まず定冠詞は既知の物事を表す名詞の前に使い、不定冠詞は次に来る名詞を特定せずに多くあるものの中の1つとして扱う場合に使うと習います。これはその通りです。例文1のAとBは、定冠詞と不定冠詞の意味の違いを表しています。

第3章

数量形容詞

Chapter 3

The Quantitative Adjective

1 数量形容詞を含む主語の訳し方

Numerous invoices, some locations, thirty years, a little juice などに見られるように名詞句を修飾し、ものの数や量を表す形容詞を、数量形容詞と呼びます。[数量形容詞＋名詞] という名詞句だけを訳すのであれば、そのまま英語の語順に従って「多くのインボイス」「いくつかのロケーション」などと訳しても問題はないと思います。が、その名詞句が英文の主語として使われている場合、日本語の訳文でも英語と同様に主語として訳すと、不都合が出てきます。

まず、数量形容詞を含む英文を2通りに訳してみます。試訳と修正訳の日本語としての響きの違いを考えてみてください。

例文1 [In the past year, the number of psychiatric clinics offering help for the burned-out, laid-off business person has increased tenfold.]

原文 Many can't face the shame of telling their families about their depression.

試訳 多くの人々が恥ずかしくて自分の鬱病のことを家族に告白できずにいる。

第5章 助動詞

Chapter 5 The Auxiliary Verb

日本の学校英語で助動詞 (auxiliary verb) というと、can は可能「～できる」または許可「～してもよい」、may は推量「～かもしれない」または許可、must は義務「～しなくてはならない」または強い推量「～にちがいない」というように、一応定義付けられています。もちろんこれは正しい定義ですが、実用英語の助動詞の用法はこれより幅広く、たとえば may をいつも「かもしれない」と訳していたのでは間に合わなくなります。本章では、助動詞が持つ意味の種類とその訳し方を紹介します。

1 未来のイベントが起きる確実性

英語では、未来のイベントが起きる確実性を表す表現として助動詞が頻繁に使われます。こういった表現を和訳する際の指針の1つとして「確実性チャート」を紹介します。これは主な助動詞を「未来のイベントが起きる確実性」の意味で使う場合、その次に来る本動詞の表す動作・状態がどのくらいの確実性で起きるかをおおざっぱに、また相対的に示したものです。

第 7 章

時の接続詞

Chapter 7

The Temporal Conjunction

時を表す接続詞には as、when、before、after、till、until、while などがあり、いずれも発生した 2 つのイベントの時間的な相互関係を表すものです。この種の接続詞は一見簡単に思えますが、実際の文章の中で訳そうとすると意外に苦労することがあります。本章では、翻訳する際にどのような問題があるのかを検討します。

1 千変万化する as

これほどいろいろな意味を持つ単語もないと私が思うのが as です。まず、as の意味範囲の広さを確かめてみます。

例文 1

原文 As expected, the president designated his favorite aide as chairman of the committee.

訳例 予想通り、大統領はひいきにしている側近をその委員会の会長に任命した。

第 1 章

比較級、同等比較、最上級

Chapter 1

The Comparative, the Equative and the Superlative

まず、次の例文 1 を見てください。

例文 1

原文 Susan drives a car faster than I do.

この単純な英文を日本語に訳すとしたら、普通は下のどちらかになるでしょう。

訳例 A スーザンは私より速く車を運転する。

訳例 B スーザンは車を運転するのが私より速い。

この原文の場合は、学校英文法の「～の方が～より…である」という定型訳を使っても問題ありません。ところが、英語の比較級にはこれよりはるかに複雑なものが沢山あります。英語では比較対象として許容される 2 つの事物・事象の範囲が日本語の場合より著しく広いこともあり、比較級の翻訳にはかなり工夫が必要だと察することができます。本章では、一般的な比較級から始めて、英語にはあっても日本語にはない比較概念、それに加えて同等比較と最上級を翻訳する際の指針を紹介します。

第2章 受動態

Chapter 2 The Passive Voice

英語の受動態を日本語に訳すとき、そのまま受動態で訳すべきでしょうか。機械的にそのまま受動態にした場合、見かけは確かに英日どちらも受動態ですから、訳語の選択さえ間違えていなければ、正確な訳であると言えるかもしれません。しかし、真の翻訳は、表層構造のレベルのみで行うものではありません。つまり、翻訳の目的は表面の文体を同じにして訳することではなく、中にある意味を同価にして、しかも自然な表現で訳すことなのです。英語の受動態表現の訳し方には、以下に挙げる4つの原則があります。

1 受動態和訳の第1原則

自然な能動態をできるだけ使う

英語が受動態であっても、日本語の能動態や自動詞を使って自然な表現ができるのなら、できるだけ日本語の能動態を使って訳します。まず次の文で使われている受動態の日本語訳について考えてみます。

例文1

原文 What is this fish called in Japanese?
試訳 この魚は日本語で何と言われますか。

この原文の受動態は、上の試訳のように日本語でもそのまま受動態として

比喩、諺、格言および慣用表現

Chapter 5
Figurative Expressions, Proverbs and Idioms

私たちの言語生活は比喩や慣用表現に囲まれていると言っても過言ではありません。当然、英語の原文にも頻繁に比喩や慣用表現が出てきますが、問題は英語を日本語に直訳しても意味が通じないとか、ひどいときにはとんでもない誤訳になってしまうということです。

 1 直喩

比喩には細かい区分がありますが、代表的なものは2つです。1つ目の比喩はあることを他のことに直接例える比喩で、直喩（simile）と言います。英語では as や like、日本語では「あたかも」「まるで」「ちょうど」などのことばが伴うので、それが直喩であることはすぐわかります。

- ・ as cool as a cucumber
- ・ like a deer in the headlights

上の最初の例は「キュウリのように冷静」ということですが、キュウリがどうして冷静なのか、日本人には想像がつかない表現で、そのままでは訳せません。キュウリは使わず、「冷静だ」などと平たく訳するのが妥当でしょう。また、次の例は「ヘッドライトの中の鹿のように」となっています。鹿がよく出る地域にお住まいの方はわかると思いますが、鹿が暗い夜道を横断